

マイカーを点検しよう。日常点検 15項目チェックシート!

判定 ○ or X



エンジンルームチェック 5項目



ブレーキ液の量

ブレーキ液のリザーバ・タンクを見て、液量が上限ラインと下限ラインとの間にあるかどうかを点検します。液量が下限ラインより低い場合は、安易に補充せず、早急に整備のプロに相談しましょう。



冷却水の量

冷却水のリザーバ・タンクを見て、液量が上限ラインと下限ラインとの間にあるかどうかを点検します。この冷却水が下限ラインに近いか、それより少ない場合は、上限ラインまで冷却水を補充しましょう。



エンジン・オイルの量

エンジンに付いているオイル・ゲージを抜きとり、付着しているオイルを拭きとてから、ゲージをいっぱいに差し込み、再度抜きとてオイルの量を見ます。ゲージの先端についてる2本のラインか、ギザギザ部分の目印の中間にオイルがあれば合格です。ゲージの下限ラインよりもオイルが下側にあるときは補充しましょう。また、汚れている場合は交換しましょう。



バッテリ液の量

バッテリの液量が規定の範囲（上限と下限の間）にあるかを車両を揺らすなどして点検します。バッテリ液は腐食性が強いので、体、衣服、車体などに付着しないよう注意しましょう。



ウインド・ウォッシャ液の量

ウインド・ウォッシャ液の量が適当かを点検します。液量が少ないと場合は上限まで補給しましょう。

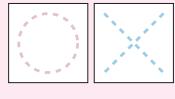


外回りチェック 4項目



ランプ類の点灯・点滅

クルマにはヘッド・ランプ、車幅灯、ストップ・ランプ、テール・ランプ、ウインカーなど、多くのランプが付いています。点灯・点滅の有無を確認し、レンズの汚れや損傷も調べましょう。点灯・点滅していない場合は、すみやかに交換しましょう。



タイヤの亀裂・損傷の有無

タイヤの亀裂や損傷の有無を目で確認するとともにタイヤの異物チェックも入念に行いましょう。タイヤにかみ込んだ異物はきれいに取り除きましょう。また、タイヤが片減りしている場合は要注意。整備のプロに相談しましょう。



タイヤの空気圧

タイヤの接地部のたわみ具合を目で見て判断しましょう。接地部のたわみ具合で判断ができない場合はタイヤゲージを使って点検しましょう。タイヤの空気圧が不足している場合は、指定空気圧まで補充しましょう。



タイヤの溝の深さ

タイヤの溝の深さが浅いかをタイヤの接地面のスリップ・サインを目印に、チェックします。スリップ・サインは溝の深さが1.6mm以下になると、現れます。溝の深さが足りないと、スリップしやすくなり、雨天走行時はとても危険です。サインが現れたら、早急にタイヤを交換しましょう。

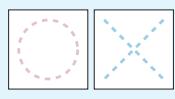


運転席でチェック 6項目



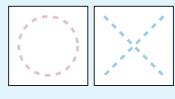
エンジンのかかり具合・異音

エンジンが速やかに始動し、スムーズに回転するかを点検します。また、エンジン始動時やアイドリング状態で、異音がないかを点検します。



ブレーキの踏みしろときき具合

エンジンをかけて異音がないかどうか確かめたうえ、ブレーキ・ペダルを強く踏み込んだとき、床板との間（踏みしろ）が適当かどうか確認します。また、その踏みごたえがいつもと違うなと感じたら要注意です。踏みごたえの違いの判断は、新車時や定期点検直後のブレーキ・ペダルのフィーリングで判断するといいでしょう。



駐車ブレーキの引きしろ（踏みしろ）

駐車ブレーキをいっぱいに引いた（踏んだ）ときに、引きしろ（踏みしろ）が多いすぎたり、少なくすぎたりしないかをチェックします。ブレーキ・ペダルと同様に、新車時や定期点検直後との違いを比較してください。



ウインド・ウォッシャの噴射状態

ウインド・ウォッシャ液を噴射させ、ワイパーの作動範囲に噴射されるかチェックします。また、その向きや高さが適当か点検します。



ワイパーの拭き取り能力

ワイパーを作動させ、低速および高速の各作動が不良でないかを点検します。また、ウインド・ウォッシャ液がきれいに拭き取れるかを点検します。ワイパーのから拭きは、ガラスを傷つけますので、ウインド・ウォッシャ液を噴射してからワイパーを作動させましょう。



エンジンの低速・加速状態

エンジンを暖機させた状態で、アイドリング時の回転がスムーズに続くかを点検します。次に、エンジンを徐々に加速したとき、アクセル・ペダルに引っ掛かりがないか、スムーズに回転が上がるか、走行するなどして点検します。



※自家用乗用車の定期点検は、1年ごとに点検を行う項目が細かく決められており、整備のプロにまかせたほうが安心です。